心筋 I

44 肥大型心筋症(HCM)にみられるmyocardial squeezingの心筋灌流動態への影響

木原和生[1],緒方雅彦[1],山口龍太郎[1],古賀義則[2],戸嶋裕徳[1],森田誠一郎[3],(久留米大学第三内科[1],同循環器病研究所[2],同放射線科[3])

肥大型心筋症(HCM)にみられるmyocardial squeezing(MSq)の心筋灌流動態への影響を、運動負荷、dipyridamole(DP)負荷^{201}Tl心筋シンチおよび、運動負荷^{99m}Tc心プールシンチから、washoutrate(WR)、Tl uptakeの増加率、左室駆出率(EF)を求めて検討した。対象はHCM 32例(男23名、女9名;39±13歳)で、冠動脈造影で中隔穿通枝にgradeII以上のMSq(+)群16例と、gradeI以下のMSq(-)群16例に分類した。運動負荷心筋シンチでは、MSq(+)群の心室中隔部におけるWRはMSq(-)群に比し有意に低値を示したが側壁部では差を認めなかった。一方、Tl 2回分注DP負荷心筋シンチではMSq(+)群におけるTl uptakeの増加率は、MSq(-)群に比し心室中隔・側壁部共に有意に低値を示した。また心プールシンチでもMSq(+)群では中隔部のEFの増加率はMSq(-)群に比し有意に低値であったが、側壁部では差を認めなかった。従ってHCMにおけるMSqは、心室中隔部の心筋灌流を障害し冠拡張予備能を低下させ、運動時の左心機能障害を生じる一因と考えられたが、側壁部の冠拡張予備能の低下は説明し得なかった。

45 Acromegaly heart diseaseの核医学的検討

河村康明，山崎純一，奥住一雄，武藤敏徳，若倉学，岡本　淳，森下　健，宮地幸雄，入江　実(東邦大学第一内科)，井上和子(同医療短大)

成長ホルモンの心筋血流及び心機能との関連をAcromegaly heartの存在を含めて，核医学的に検討を行った。末端巨大症患者10名(平均61.9歳)についてTl-201運動負荷試験，Tc-99m人血清アルブミン左右心機能の測定を行った。10名中，5名に高血圧(1名は心筋梗塞併発)，1名に高拍出性心不全をきたし，計60%に循環動態の変化をきたしている。Tl-201運動負荷試験では50%にTl-201の分布異常を示し，心機能は心係数3.0L／min／m^2，左室駆出率52.8%，右室駆出率42.1%であった。また同時期に測定した血中成長ホルモン値は23.6ng／mlとやや高値であった。成長ホルモンの心臓への直接的，間接的影響によって循環動態や心筋血流への変化が認められ，二次性心筋症との関係も予測され，興味ある示唆を呈した。

46 甲状腺機能亢進症及び低下症の心血行動態変化

岡本　淳，河村康明，山崎純一，奥住一雄，武藤敏徳，若倉　学，森下　健，宮地幸雄，入江　実(東邦大学第一内科)，井上和子(同医療短大)

甲状腺ホルモンの異常に伴う一般症状の変化は直接的及び間接的な影響により，心循環症状が主体である。しかしながら，ホルモン変化に伴う心筋代謝の変化や心機能の変化は報告も少なく定まらない。

甲状腺機能亢進症12例(βブロッカー使用群6例，非使用群6例)，甲状腺機能低下症6例に対して，治療前及び治療1ケ月以後(ホルモン値が正常領域)において，Tl-201の心・甲状腺・肝・肺の静注直後・3時間のwash outを正面像にて撮像・コンピューター解析を行った。また同時に，Tc-99m心シンチグラフィーを多段階運動負荷試験を自転車エルゴメーターにて行い，運動耐容能をpressure rate productなどの他の心パラメーターと比較検討した。

甲状腺機能亢進症及び低下症共にそのホルモン値の正常化に伴い，若干の変動はあるものの，心筋代謝や心機能も正常パターンに近づいた。

47 糖尿病患者におけるTl-201負荷心筋シンチグラムによる検討(第一報)

宮下岳夫，永井義一，渡辺　健，近藤宣如，穂坂英明，吉崎　彰，青木　貞，小林泰彦，山沢脊宏，伊吹山千晴，能登谷洋子*，村山弘泰**，(東京医科大学2内，*同3内，**同放射線科)

糖尿病患者の合併症の一つとして、冠動脈病変や微細血管病変が報告されている。今回我々は、臨床上明らかな心疾患を認めない糖尿病患者23例に対し、Tl-201負荷心筋シンチグラムを施行し、SPECT法による視覚的判定及びwashout ratio(WR)を用いた定量的判定を行ない、更に眼底所見，罹患期間，治療の有無等について比較検討した。結果：視覚的にシンチグラム上、灌流異常を認めたのは8名(35%)であった。眼底に糖尿病性変化を認めるものは、SPECT異常例で多い傾向がみられたが、その他罹患期間，治療の有無等は、両者に有意な差異を認めなかった。WRに関しては、糖尿病患者全体で低下傾向を認め、いわゆるbulls-eye法による評価では、支配冠動脈と関連性のない斑紋状の不均一なWRを示す傾向がみられ、心筋内微細血管の変化や心筋の変性等が示唆された。考案：Tl-201負荷心筋シンチグラムは、糖尿病患者の心筋内微細血管病変を評価する上で有用であると思われた。

Presented by Medical*Online